

令和6年度「校内サポートルーム(KSR)研究指定校事業」 成果報告書

1 指定校・指定校群 (高松市立桜町中学校 KSR-I)

2 実施の内容

(1) KSRの環境整備

- 「高松市不登校Q&A -児童生徒の社会的自立に向けて-」も参考に、1F角部屋を5つのゾーン（①共有スペース、②管理スペース、③メインスペース、④個別スペース、⑤くつろぎスペース）に区切ることで、個により、日により、大きく異なる生徒の状態に合わせた過ごし方ができるよう工夫する。
- 加えて、個人ロッカーを設けるなど、利用生徒が自分の居場所として実感できるよう配慮する。
- 机やパーテーションの配置場所は、利用生徒の状態により、その都度変更する。

(2) 生徒の状況に即した自己決定場面の設定

- 1日の生活を自己決定させる場面を意図的に設定する。自己決定の範囲と程度は生徒によって大きく異なるが、短時間であっても、自分なりに考え、それを実行して過ごす経験を重視する。給食を（食べる・食べない）（自分で取りに行く、持ってきてもらう）といったことから始める。

(3) 教職員の連携強化

- KSR担当は、生徒指導委員会・学びの多様化支援委員会(旧不登校対策委員会)・職員会議で、生徒個々の状況やKSR全体の様子、担当としての課題を報告し、学校全体での共通理解・共通実践が進むよう努める。
- 養護教諭、SC、SSWも常態的にKSRに足を運ぶことで、いろいろな視点から情報を集め、個別の支援計画の見直しや連携強化に活かす。
- KSR担当は、現職教育主任と連携しながら専門家による研修を位置付け、特別支援教育に関する研修とも合わせて「教職員の受容的な態度の促進」と「教職員の見立て・共感的な理解・対処」に関する資質の向上に努める。

(4) 不登校生徒の「親の会」との連携

- PTA主導の「親の会」(年5回程度開催)にもKSRの状況を説明し、理解と協力を得よう努める。また、KSRへの関わりも通して、不登校生徒保護者の「孤立化予防」に努める。

3 成果

(1) 校内サポートルームにおける生徒の様子

利用状況は下表のとおりである。顕著な変化が見られた生徒について記載する。

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月
登録人数[人]	13	16	16	20	22	23	22	22
授業日数[日]	16	21	20	14	19	22	20	17
累積利用人数[人]	74	146	190	145	168	202	210	168
平均利用人数[人/日]	4.6	7.0	9.5	10.4	8.8	9.2	10.5	9.9
延べ利用時間[時]	233	490	570	460	557	676	703	457

○A(1年女子、LGBTQ 疑い)

こだわりや好き嫌いが強く、友人関係を築くのが難しい生徒である。黒詰め襟で登校しており、着替えも別室で行っている。6月に欠席が増えたが、KSRには、ほぼ毎日、朝から登校できている。1日の生活を自己決定する際には、KSR担当が所属学級と支援学級の双方の時間割を示し、どの授業を受け、どの時間をKSRで過ごすか、一緒に考えるなどの関わりを重ねてきた。2学期は、五色台宿泊学習に参加できたり、所属学級の5つの教科等と、支援学級の2つの教科の授業への参加を決めたりするなど、生活が安定してきたと受け止めている。

○B(2年女子)

小学校の時から、ほぼ全休の生徒であり、学力も小2程度、保護者の関心も薄い。服装や頭髮等に相当の課題はあるが、KSR創設を機に、学級担任が通室を勧め、週1日程度、KSRに登校できるようになっている。人と話をするのが好きなので、登校時は、KSR担当や養護教諭、SC、SSWと話をする時間を設定している。話をすることで、家庭の様子や不安に感じていることなどの把握につながっている。

(2) 校内サポートルームにおける活動及び支援の工夫

①活動の工夫

○無理のない・無理強いしない自己決定

- ・座席指定ではなく、自分で過ごしたい場所をその時々で選択する。給食も選んだスペースでとる。
- ・登校後、時間割や行事、KSRにくる予定の教員等をみて、その日の在校時間、給食、参加する授業、KSRで過ごす時間等を自分で計画し、自分のファイルにポートフォリオする。決められない時は、「考え中」でも可。教員はこのファイルを見て生徒の状態をつかみ、無理のない・無理強いしない支援に当たる。

・ワンステップ目標として、例えば、月初めに「KSRの過ごし方(目標)」を考える場面を設定する。「4時間目が始まる前までに来るようにしたい」など、生徒の状況に即して、まず、自己決定できたことを認める。

○他者の自己決定との折り合い

- ・KSR利用生徒が増えることで、「静かに学習に取り組みたい・過ごしたい生徒」と、「好きなことをしたい・交流したい・話したい生徒」との間に、KSRに求める価値観の衝突が起こり、居心地が悪いと訴える生徒が出てきている。
- ・生徒同士で話し合うことが不得手な生徒も多い現状であったが、お互いが過ごしやすくするにはどうすればよいかについて、KSR担当が粘り強く話し合いの場を設定し、現在は、一応の「KSRの過ごし方」として、生徒間で折り合いを付けて生活することができている。今後も、多様な自己決定に係る調整を経験する必要があると思料している。

②支援の工夫

○教職員間の連携強化と、受容的な態度・理解・対処の促進

- ・現状においては、KSR担当を週 16 時間配置し、教職員連携の要として、また、生徒を周りの人とつなぐ要としている。KSR担当が通常学級で授業をしている時間は、どの教員がKSRを担当するのか時間割表に示し、教職員間の連携がとりやすいようにしている。このことは、「KSR担当の先生がどの時間について、いないときは、どの先生がくるか事前に分かるから安心。」との声が聞かれるなど、生徒の安定化にもつながっている。
- ・給食や昼休み等、養護教諭やSC、SSWもKSRを訪れることで、複数ルートでの人間関係の構築に努めている。養護教諭とSSWは、毎週月曜日の生徒指導委員会に参加し、情報を共有している。
- ・長期休業後に欠席が増えることを想定し、学期が始まる前(今年度は8月下旬)に、KSRの運営や生徒対応の実際について、SC、SSWを交えた全教職員で研修を行い、共通理解・共通実践に努めている。

○保護者・地域の理解と後押し

- ・R4にPTA主導で発足した「親の会」と連携し、KSR見学会(今年度は 6/8、6/13 の2回開催、保護者18名が参加、SCも参加)を行ったり、学校運営協議会で現状を説明したり、新入生周知会やPTA総会でKSRを紹介したりするなど、KSRの目的や取り組みについて、理解を得る機会を模索している。これらのことは、不登校生徒の保護者の「孤立化予防」にもつながっていると受け止めている。
- ・保護者からは「先生方が連携して子どもや保護者に関わってくれることが心強い。」「小さな『できた』を肯定してもらえる、自己決定を否定されない空気が通常のクラスにも流れるとよい。」など、肯定的な感想が多く見られている。

○そこにいてもいい存在－居場所の実感－

- ・生徒がホワイトボードに描いた絵や文言、特技や興味を生かして作った作品、皆で作ったパズルなどは、そのまま残したり、写真に撮って掲示したりしている。そういった生活の足跡をKSRに顕在化していくことを、「そこにいてもいい存在」であることの実感を高める手段の一つとしている。

○学力支援

- ・学力が十分でない生徒も多いことから、小学校の教科書を常備している。また、教室の授業を中継する時間を提示したり、学年を超えて美術の制作活動に取り組んだりしている。

(3) 総括

①それぞれの立場からみたKSRのよさ

- 担当：・保護者も含め、KSRの認知が進み、利用者も増加していること。(欠席30日以上16名、30日未満7名が通室)
 - ・毎日くる生徒、週2～3回くる生徒、昼からくる生徒、朝だけくる生徒、給食だけくる生徒、教室・保健室と往來する生徒など、いろいろな生徒への対応を通して、「過ごしにくさ」の把握が進んでいること。
 - ・KSR利用の約束事を生徒間で話し合えたこと。

○生徒：担当の先生がいることで、「安心できる」「困ったら相談できる」こと。自分でスペースを選んで生活できること。

○SC：通室する生徒の表情がよいこと。環境を整え、先生方の関わりも増えてきたことで、教室に入ることができない生徒も、授業や教室の様子を知ることができ、行事等への参加意欲向上につながっていること。

○SSW：KSRに子どもの存在感があること。「そこにいていい存在」だと生徒が感じていること。

○保護者：環境が整い、些細なことでも自己決定しながら生活できていること。小さな「できた」を肯定してもらえること。

②課題として捉えていること

○生徒がKSRに求めるものの違いへの対応の充実と、違いの調整を生徒の自立につなげていくこと

自己決定を重視する一方で、「勉強したくない・話したい生徒」と「静かに過ごしたい・関わられたくない・関わりたくない生徒」の間に価値観の衝突が存在しているが、その調整を生徒自身ができるようにしていきたいと考えている。最終的には、「居場所」と「学習の場」のバランスを、生徒が自己調整できるようになることを目指したい。

○目的意識を持った進路選択ができるよう支援すること

KSRで過ごしている1年生が、入試時期を迎えた3年生を見て「…通信があるなら、それでいい…」と考えている。通信制はよいのだが、目的意識を持った選択ではないように見えることから、教員側に「このままでいいか」、葛藤が生じている。現状においては、「こういうことも見えるようになってきた」と前向きに受け止め、「不登校は最終的に進路の問題」との共通理解のもと、「いそがず・複数ルートで」支援を継続したいと考えている。